

はくぶつかんの部屋 6

～喜友名探検隊!!～



「展」と題し、毎年市内各字の一つにスポットを当て、歴史や文化を紹介しています。「入門編」から始まり、今年で5回目の開催になります。

今回は、喜友名区自治会 喜友名字誌編集委員会と共催で字喜友名の歴史や文化について紹介します。喜友名には、喜友名貝塚や喜友名東原^{アカハル}又バタキ遺跡、喜友名グスクという遺跡があり、二千年以上前から喜友名の地には人が住んでいたことがわかります。

喜友名グスクは集落の北端にあり、石垣がめぐらされ、拜所が五、六か所もあり、背後から集落を守る位置にありました。しかし、戦前の県道工事などによって大半が破壊されてしまいました。

喜友名には、バシガー・ミーガー・ヒージャー・アカンナー・カークワー・ウフガーなどの七カ^{なな}と呼ばれる湧泉があり、水量豊富な村で

した。戦前までは米づくりがなされており、とても豊かな村でした。また、集落内には7体の石獅子が集落を取り囲み、喜友名の皆さんを守っています。どれも個性的な顔立ちをしています。

さてさて…この辺でみなさん喜友名に興味が出てきましたか?ここで紹介した喜友名はほんの一部です。喜友名泉や石獅子についても、もっとお話ししたいことはあるのですが、もっと詳しく喜友名を知りたい方は、現在博物館で開催中の「ぎのわんの字展」シーサーが見守るちゅんなームラ」まで是非お越し下さい!もつと面白く、魅惑の喜友名に出会えるはずですよ。



▲国指定重要文化財「喜友名泉」



▶石獅子 (ナカムトゥ前のシーサー)

■ぎのわんの字展
シーサーが見守る「ちゅんなームラ」
七泉の恵み・グスク腰当て

【会期】2月1日(水)～2月26日(日)
【入館料】無料

お問い合わせ
市立博物館 ☎870-19317

茶 ぐわーゆんだく 94

サーターヤーのある風景

戦前の宜野湾村は、人口1万3千人ほどの純農村でした。常食のサツマイモを中心に自給自足で野菜の栽培、そして沖縄で主要な換金作物であるサトウキビは特に農家経営には欠かせない作物でした。サトウキビの収穫は製糖期である旧暦の12月から翌年4月頃まで行われました。収穫されたサトウキビは、嘉手納の製糖工場や普野城製糖工場に運んだり、自家製糖を行っていました。

自家製糖の場合は、各字に何カ所かあるサーターヤー(製糖小屋)で一般的に砂糖組と呼ばれる、共同で製糖を行う組織で作業が行われていましたが、製糖作業は人手のかかる大変な作業でした。

サーターグルマ(製糖車)にサトウキビを1、2本挟み込み、牛や馬の動力によって回転させ、サトウキビの汁を搾り出します。それからサーターヤー内の砂糖釜でその搾り汁を何時間、何日もかけて煮詰めます。不純物を除去するために石灰を加えながら煮詰め、濃縮し固めたものが含蜜糖(黒糖)です。

『字誌ぎのわん』によると製糖作業は一日8人くらいで、朝3時頃から始まり

夜12時頃まで行ったようです。若者の中には、その作業の後、モーアシビー(毛遊び)に出掛け、そのまま眠らず、再び製糖作業を始めた元氣者もいたようです。貴重な黒糖を作るため、村や近所の人々、家族がユイマールで助け合いながら農業や作業が成り立っていました。その心を私たちがいつまでも受け継いでいきたいものです。



◀サーターグルマ



▶製糖風景 (市民広場にて)

「宜野湾市史」への問合せ
教育委員会文化課 ☎893-4430